

を得た。

以上、臨床試験および動物実験の成績から、1. penam 剤および cephem 剤による DTH では、両者とも類似の側鎖構造と同じ母核構造を有する薬剤間にだけ高率に交叉反応が成立する。2. これは、両者に完全な交叉抗原性はなく、両者の抗原決定基に側鎖と母核構造が共に関与しているためと考えられる。3. penam 剤による DTH では、低率ながら類似の側鎖構造を有する cephem 剤に交叉反応が成立するが、その反対方向の交叉反応は極めて成立しにくい。4. これは、両者の交叉性が側鎖構造の類似性だけに依存するものでなく、両者の母核間の 6APA から 7ACA への一方方向の交叉性にも依存するためと考えられる。

#### 6) ブドウ球菌による敗血症と髄膜炎を合併し、多発性骨髄腫をも疑われた急性腎不全の 1 例

田崎 和之・崎村 陽子  
甲田 豊・青木 信樹 (信楽園病院内科)  
薄田 芳丸・関根 理

*S. aureus* による敗血症、髄膜炎および急性腎不全を合併し、適切な化学療法で救命し得た骨髄腫疑の 1 例を経験したので報告する。

症例：69才男性、S63。1月、発熱、両下肢痛で発症、次いで食思不振、乏尿、意識障害をきたして入院した。入院時、多臓器不全の状態、検査では強い炎症所見を呈しており、血液と髄液より *S. aureus* が検出され、また、基礎に多発性骨髄腫の存在を疑わせる所見を伴っていた。直に IPM/cs による化学療法と血液透析を施行した。第10病日、喀痰より MRSA を検出、抗生物質を MCR に変更した。第13病日より利尿期となり、TDM を行って MCR の適正使用を図り、約1ヶ月にわたる治療で除菌に成功するとともに多臓器不全を改善し得た。

#### 7) 感染性心内膜炎における long half-life cepheims の応用

武 田 元 (長岡赤十字病院内科)

感染性心内膜炎の治療の原則は抗生剤の血中濃度を起病菌の MIC や MBC の数倍の値に維持することであると言われている。このような有効血中濃度を維持するためには、抗生剤の頻回の筋注や静注または持続点滴静注を必要とし、患者にかなりの苦痛を与えてきた。

最近、血中半減期の非常に長い CPM や CTRX が市販されるに至って、1日1、2回の注射で有効血中濃度の維持が可能となった。そこで、5例の感染性心内膜

炎に CPM 1日2回静注または CTRX 1日1回静注を試みたので、その成績を報告する。

CPM 1回2g、1日2回の静注を試みたのは3例、CTRX 1日1回1g静注を行ったのは1例、CTRX 1日1～2g静注が無効で、CPM 1日2回静注に変更したのが1例であった。原因菌は *S. viridans* group 3例、*S. sanguis* 1例、不明1例であった。治療期間は28～79日間で、5例とも治療に成功した。

#### 8) 当院における人工呼吸管理を行った超未熟児の胃液培養の変遷

山崎 明・永山 善久 (新潟市民病院)  
坂野 忠司・大石 昌典 (小児科)  
小田 良彦

昭和60年より昭和62年までの3年間に当院に入院した出生体重 999g 以下の超未熟児のうち、経過中に人工換気療法を行い、かつ1週間以上生存しえた24名につき、継続的に行った胃液培養の結果を主として *S. aureus* に注目して検討した。

経過中に培養にて *S. aureus* の証明された児は19名(79%)であった。その年度別内分は、昭和60年は4/5、61年は 4/5、62年は 11/14 であり、陽性率に年度差はなかった。しかし、薬剤感受性については、昭和60年は全て MCIPC に感受性があるが、61年は2例において MCIPC に感受性がなく、かつこの2例は経過中に *S. aureus* は証明されなかったが、壊死性腸炎により突然状態が悪化して死亡した症例にひきつづき、2月、3月に入院した例であった。昭和62年度の11例では1例のみに MCIPC に感受性がなかった。

なお、当院では、昭和62年4月に従来の未熟児室より、新生児医療センターに転棟しているが、その前後で、培養結果に特別の変化は認められなかった。

#### 9) セフミノクスナトリウム (CMNX) が著効を示した肺感染症の 2 例

俵谷 幸蔵・鈴木 栄一 (新潟市民病院)  
川崎 俊彦 (呼吸器科)

急性肺炎、肺化膿症それぞれ1例に CMNX 単剤、点滴静注で投与し、いずれも著効を示した。症例1は82歳女性で、主訴は発熱、右胸痛、口渇。既往歴に糖尿病、高血圧、心臓肥大が認められる。胸部X線上、右上中肺野とくに S<sup>3</sup> に浸潤影が認められ入院。CMNX 2g/日、28日間投与し、胸部X線像、炎症所見など著しく改善した。症例2は50歳男性で、主訴は咳嗽、膿性痰、発熱。日本酒2～3合/日。胸部X線上、右肺 S<sup>2</sup> にφ4

cm 大の空洞を伴う浸潤影を認め、CMNX 2 g/日、20日間投与した。自覚症状、胸部X線像、炎症所見とも著しく改善したことから、CMNX は嫌気性菌にも有効である可能性が示唆された。なお、副作用として1例に軽度肝機能障害が認められた。

#### 10) 肺膿瘍の臨床的検討

嶋津 芳典・和田 光一 (新潟大学第二内科)  
荒川 正昭

近年、強力な抗菌剤の出現により、肺膿瘍の臨床像に変化がみられている。昭和59年から63年の間の当科における肺膿瘍自験例19例の、臨床的検討を行った。基礎疾患は14例に認め、内訳は肺癌、慢性腎不全、糖尿病、膠原病、ステロイド大量使用例などであった。自覚症状では、咳嗽、膿性痰が多く、検査では、CRP 強陽性、白血球著増例が多かった。起炎菌は、嫌気性菌が11例中4例、S. aureus が3例と、高率に認めた。初回治療で全例が、セフェムあるいはペニシリン系抗菌剤を使用し、16例中著効9例、有効3例、無効4例であった。抗菌剤の平均使用日数は39.4日で、長期使用例が多かった。空洞径5 cm 未満では、11例中9例で空洞が消失し、CRP も早期改善を認めたが、5 cm 以上では、全例で空洞が残存し、CRP の高値が遷延する傾向を認めた。予後は、16例中14例で軽快を認めた。

#### 11) 骨髄炎病巣内 (6 症例) への Fosfomycin (FOM) 移行性の検討

一橋 一郎・倉田 和夫 (新潟県厚生連中央  
総合病院整形外科)

投与した抗菌剤が、骨髄炎病巣内へ、どの程度に移行しているかを検討した報告は僅かで、私達はその点に着目し、まず、正常骨髄組織等に良好な移行性を報告されている FOM を用いて、急性1例、亜急性2例、慢性3例の、各病態の骨髄炎6症例の病巣郭清術に際し、術前に投与しておいた FOM が、病巣内、とくに膿中にどの程度の移行性を示すかを、同時点の血清中 FOM 濃度との比較を主体に検討を試みた結果、FOM 投与後の1~3時間で、血清中濃度の実に30~100%以上に及ぶ膿中濃度の存在を知った。この濃度は、試験菌株の FOM の MIC を十分に凌駕している上、1例の腐骨塊体にも、十分に検出可能な量の FOM が存在することも示された。病態の異なる6例のみの骨髄炎症例での検討ではあるが、FOM は、正常骨髄組織のみならず、骨髄炎病巣内、とくに膿へも十分に治療効果の期待出来る

良好な移行性を示すことがうかがえた。

#### 12) 脊髄損傷患者の尿路管理の1例

平 岩 三 雄 (三条総合病院泌尿器科)  
高 木 隆 治 (新潟大学泌尿器科)

症例、34才、男、初診：昭和60年6月24日。主訴：脊髄損傷における尿路管理。病歴：昭和55年8月 L1 圧迫脱臼骨折による脊髄損傷にもとづく固定期の神経因性膀胱で排尿困難、尿失禁、膿尿があった。排尿困難には自己導尿、尿失禁にはベニックの装置、Pine Tree Bladder・膀胱尿管逆流にもとづく尿路感染に対しては Mild Chemotherapy でのぞんだ。経過中に慢性腎盂腎炎の急性増悪を繰り返すため、尿失禁傾向を強めるために外括約筋切開・TUR-P を行い一時は尿路感染を良く Control できたが、術後5月後の昭和62年11月1日に尿道瘻を生じ再来した。カテーテル留置と強力な化学療法にて尿道瘻は閉鎖したが、尿道憩室と高度な尿路感染が残った。尿細菌培養を見ると、何回となく菌交代現象をおこし Flavobacterium odoratum が検出され、薬剤耐性も強く感受性は CMNX などの数種類にすぎなかった。そこで昭和63年1月21日に膀胱瘻術を施行した。術後感染防止には CMNX 2 g and DKB 100mg を使用し経過は極めて良好であった。以降定期的なカテーテル交換と ENX による Mild Chemotherapy にて良好に管理されている。

脊髄損傷患者の尿路管理においては、一生尿路感染との戦いが続くので菌交代現象などを考えると、化学療法剤の投与は急性期や手術などの負荷のかかる時期を除いては、必要最小限もしくは細菌尿があっても臨床症状が無く腎機能が良く保持されている場合には投与しない方がよい。

#### 13) 急性虫垂炎に対する術前、術後の抗菌剤投与の影響

一特に急性相反応蛋白の変化について一

小 林 英 司 (町立三川病院外科)

急性虫垂炎と診断した上で保存的に経過を観察する際の抗菌剤の使用については肯定、否定論があるが、抗菌剤の使用はあくまでも補助的なものでありいたずらに長く、またその場しのぎで使用してはならない。今回急性虫垂炎患者(蜂窩織炎性5例、壊疽性4例、穿孔性3例)に術前 PIPC 2 g × 1回(ピギー)、術後 PIPC 2 g × II (回)(ピギー)/4日間投与した。その経過中の白血球数及び急性相反応蛋白(CRP、 $\alpha_1$ -アンチトリプシ